E75† No.360



2001 NOVEMBER



日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2002年HAJサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、 幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力な スタッフの配置、隊員の積極的な参加によって対 処して成功に結びつけたいと思います。

尚、パキスタン登山の申請は、年内に行わなければならないので、希望者は早目の申込みにご協力下さい。(日程を変更しました)

記

1. 期間:2002年7月19日(金)~8月26日(月)

2. 募集人員:10名程度

3. 負担金:75万円

4. 資格: 冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って 行動できる人。

5. 申込 / 切:11月30日 (定員になり次第 / 切)

6. その他: HAJの登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿に参加の義務があります。

チベット ニンチン・カンサ(7,206m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。HAJは既に3回登頂に成功しています。ルートは1998年にHAJ隊が初登攀した西稜を予定しています。

記

1. 期間: 2002年7月20日~8月25日 (37日間)

2. 募集人員:10名程度

3. 負担金:85万円

4. 資格: 冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って 行動できる人。

5. 〆切り: 定員になり次第

6. その他: HAJの登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。

表紙写真

カンチェンジュンガ $(8,586 \,\mathrm{m})$ の北面第一キャンプの下からは、ドローモ $(6,885 \,\mathrm{m})$ を望むことができる。1998年春、反対側のブロークン氷河から、ダグ・スコット隊がトライしたが登頂できなかった。

(文と写真:田辺 治)

ヒマラヤ No.360

1.	パスー氷河の不思議な動き	井上	重治
10.	ヒマラヤ・ニュース 〈地域ニュース・ヒマラヤから・Boo	ks・インフォメーション〉	
13.	フーバー兄弟	中川	裕
15.	エヴェレスト入山者	山森	欣一
24.	寸感•事務局日誌		

パスー氷河の不思議な動き

8年間の観察結果

井上 重治

はじめに

カラコルム・ハイウェーを北上して、フンザの 先のけわしい渓谷を抜けると、ゴジャールの開け た段丘が広がる。そのままグルミットを過ぎてし ばらく走ると、左手に真っ白い氷河が下がってき ているのが見える。これがパスー氷河である(写 真1)。

私が初めてパスー氷河に出会ったのは、1993年4月の、まだ降雪のある寒い時期であった。グルミットからボーリット湖を経てパスーギャル(3000メートル)に一泊し、翌日巾1.5キロのパスー氷河を横断して対岸のラズダール(3500メートル)へ渡った。この時、ラズダールの上流に異常な高さ(同行した現地ガイドの話では30メートル以上)の黒い氷塔があるのに気がついた。丸い石を抱き、先の尖ったこの氷塔の写真を、帰国後に国立極地研究所の渡辺興亜教授にお見せしたところ、これはサージ(氷河の洪水)によるものではないかといわれた(ヒマラヤ、№284、1995)。サージは氷河の波が異常に早く流れる突発現象で、これが発端になって、パスー氷河の動きに興味を持つようになった。その後、パスー出身のアミヌナール・



▲カラコルム・ハイウェーからのパスー氷河

ベイグからパスー氷河に異常が起こったとの連絡を受けて、1995年9月に再度パスー氷河を訪れた。その結果、93年にラズダール付近で認められた異常な氷の持ち上がりが、今度はパスーギャル付近で認められた(ヒマラヤ、No.302、1997)。

その後、98年7月に三度パスー氷河を訪れると ともに、2000年まで現地の人や日本の友人に依頼 して、断続的にパスー氷河の動きを監視し、興味 ある知見を得たのでここに報告する。

1) 1993年4月と1995年9月の観察

93年4月にパスーギャルからラズダールへ渡河した時は、氷河の横断ルートに例年と大きな変化はなかった(ガイドの話)が、ラズダール付近で濁り池二個所と上流300メートル付近に巨大な黒い氷塔が複数個認められた(図1)。氷塔は、氷河の異常な側圧が左岸の岩壁に抵抗され、逃げ場を失ったエネルギーによって、氷が上にせり上がったものと解釈された。抱え込んでいた丸石は、近くに川があるわけではないので、氷河の底で磨かれて丸くなったものと推定された。すなわち、この石は氷河の底から表に出てきたことになり、ラズダール付近で、氷の大変動があったことを示唆している。

95年9月の観察では、左岸のラズダール付近の 氷の盛り上がりは収まり、例の黒い氷塔も残骸が 残るのみとなっていた。そのかわり、2キロ下流 の右岸のパスーギャル周辺で、新しい氷塔(規模 はラズダールのものより小さい)の乱立と新規な モレーンの生成が認められた(図1参照)。ラズ ダール側の硬い岩盤と異なって、パスーギャル周 辺は柔らかいモレーン地帯なので、氷河の側圧は 新規なモレーンを押し上げることでそのエネルギー が部分的に吸収され、ラズダール側に見られたよ うな巨大な氷塔が生成しなかったものと考えられ る。これらの結果を総合して、2年半の間に、氷河の大波による異常な圧力が1-2キロ下流に移動したものと考えられる。このように末端から5キロ上流部では大きな変化があったにもかかわらず、氷河末端には特に異常は見られなかった。

95年9月には、写真2に示すように、ラズダール寄りの岸から300メートルの3箇所をボーリングして測量用の旗を立て、氷河の流速と消耗度を測定した。その結果、流速は1日で2.7メートル、氷の融解速度は3.5センチという結果が得られた。94年7月にラズダールより7キロ上流の高度4100メートルでの名古屋大学の瀬古勝基氏の測定では、中央部で1日1.1メートル、端に近い部分で41センチと報告している。同じく人工衛星を利用した瀬古氏の計測では、隣のグルキン氷河の3700メー

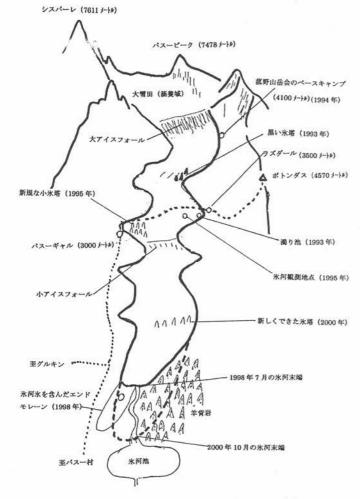


図1. パスー氷河の動き(1993年-2000年)

▼ラズダールにおけるパスー氷河の観測 (95/9)



トル付近の流速は1日55センチ、バツーラ氷河の3200メートル付近の流速は44センチであった。中国のウオン博士は、隣のバツーラ氷河の流速は、源流地で1日67センチ、中流部で30センチ、下流

部では消耗が激しいのでほとんど流れなかったと報告している。これらの値と比べれば1日2.7メートルは異常に大きいことになる。もし氷河の大波が2年半で2キロ流れたと仮定すれば、1日あたり2.3メートル流れたことになる。

水の融解速度は、94年7月の4100-42 00メートルでの瀬古氏の測定では、1日 あたり7センチとなり、ラズダールの値 (3.5センチ)よりは大きい。これは測定 した季節の差(夏と秋)によるものであ ろう。

2) 1996年-1997年の観察

氷河の動きは、人工衛星の写真を解析することによって容易に捕捉することができる。このため、筆者は宇宙開発事業団にお願いして衛星写真の提供をお願いするべく日参したが、結局素人には開かずの扉になってしまった。このため、パスー村のラスール・カーンに依頼して、96年から97年の2年間、パスー氷河を写真撮影して、その変化を観察してもらうことにした。ラスールはかってイタリア隊の氷河観測に参加しており、多少の氷河知識を有していた。パスーギャル手前、約500メートルの定点観測では、写真3

に示すように対岸の岩壁(左岸)に刻まれた古い 氷河の磨り跡(かってはこの高さまで氷河の氷が 盛り上がったことを示している)にある特徴的な 模様を基準にして判定した。その結果、95年12月 の時点よりも96年2月のほうが氷の表面高度が上 昇し、96年4月にはさらに高くなったが、97年1 月には再び沈下傾向にあることが分かった。氷の 高さは夏と冬では異なることが予想されるが、今 回は冬が中心なので、季節変動は無視できると思 われる。したがって、96年前半にパスーギャルよ り数百メートル下流を氷の盛り上がり(波)が通 過したものと考えられる。この氷の表面高度の変 化は、人工衛星では測定できない。

一方、この期間内の氷河末端は、写真4に示すように、95年、96年、97年で氷河末端と羊背岩の相対的な位置値に目立った変化がなく、顕著な前



▲1996年4月

▼1997年1月



(写真3-2)パスー氷河表面の隆起 (パスーギャル手前の観測地点よりの写真)

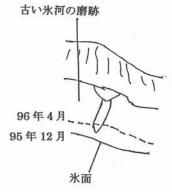
対岸の氷河の擦り跡を基準にして判定すると、96年2月から4月にかけて盛り上がり、97年1月には若干沈下している。



▲1995年12月 (写真 3 - 1)

パスー氷河 表面の隆起

パスーギャル 手前の観測地 点よりの写真



▼1996年4月



進も後退も認められなかった。しかし、現地での 細かい観察では、96年後半から若干氷河が前進を 始めた気配が感じられたという。

3) 1998年7月の観察

98年7月15日にパスー氷河を三度訪れた。今回は時間がなかったので、氷河末端の状態を調べるだけにとどまった。95年9月22日の時点では、氷河末端と羊背岩(氷河の作用で羊の背のように丸く磨かれた岩)の小山との間には明確な隙間があったのに、今回は隙間が埋まっていたばかりでなく、氷河全体が大きく盛り上がり、その一部は岩にのしかかっていた。この点は、写真5に示すように、

写真 4. パスー氷河末端と羊背岩の位置関係 ▼1995年10月



▼1996年4月



▼1997年1月



96年2月と98年7月の氷河末端の写真を比較すれば明瞭である。

一方、氷河右岸に残っていた停滞氷 (化石氷)を含むエンドモレーンが、氷河本体により前へ押し出され、その先端は氷河湖に達していた (写真6)。厚いモレーンが押し出してきたため、氷河の融水路も持ち上げられて、羊背岩側へ移動していることが認められた。もはや、パスー氷河が前

進していることは誰の目にも明白であった。この 前進は、93年4月にラズダール付近で観測された 氷の大波が、5年かかって6キロ下流の氷河末端 まで到着したためと考えられる。流速は1日あた り平均3センチと計算されるが、氷河末端近くで は消耗が激しいのできわめて遅くなると推定され る。

4) 1998年-2000年の観測

2000年10月9日にパスー氷河に立ち寄った知人の内田秋子さん、小田切久子さんの報告によれば、氷河本体が氷河湖に迫っているという。この点は、写真7に示すごとく、98年9月と2000年10月の写真を比較すれば明確である。98年にはエンドモレーンが湖に到着していたが、氷河本体は見えない。しかし、2000年の写真ではエンドモレーンは完全に氷河湖に水没し、氷河本体の姿がはっきり認められ、パスー氷河が湖水すれずれの所まで前進してきていることが分かる。

写真8は96年2月、97年6月、2000年10月の氷河末端の写真である。96年と97年では大きな変化はないが、2000年の写真では、明確に氷河末端が高くなっており、多量の氷が補給されていることが分かる。

これまでの情報を総合すると、パスー氷河末端は、1996年後半から前進を始めたが、最初はその動きは緩慢で、きわめてわずかの前進であったが、98年半ばころより加速して、98年から2000年の2年間にほば150メートル(1日あたり約20センチ)前進したことになる。地球温暖化の影響で、世界中の氷河が後退しているといわれるなかで、この前進は珍しい現象である。

一方、パスー村のアミヌラー・ベイグの報告によると、パスー氷河の中流部でも大きな変化があったという。グルキンの住民は、例年夏になると、パスー氷河左岸の上にある広大なポトンダス(4570メートル)の尾根の家畜(主に羊と山羊)を放牧する権利を得ている。彼らは、ボーリット湖の夏村から出発して、パスーギャルからパスー氷河を横断し、ラズダールで数日ないし数週間過ごした後で、背後のポトンダスに上る習わしになっている。このパスー氷河の横断中に、クレバスに落



ちたり、迷子になって若干の家畜が失われるが、 餌場としての草地の絶対量が不足しているので、 ポトンダスでの放牧を欠かすことはできない。パ スー村の人は、バツーラ氷河の両岸の草地を放牧 地としている。

1995年9月の横断では、パスーギャル側にクレ バスがかなり発生していたが、それでも横断可能 であった。96年もこのルートで家畜が横断した。 97年のルートについては確かめていないが、おそ らく96年ルートを使ったものと思われる。ところ が、98年になるとパスー氷河が荒れて無数のクレ バスができ、この通常ルートでの渡河が不可能に なり、やむなくもっと上流から横断した(図2)。 99年には、クレバスはさらにひどくなって、この 上流ルートも使用できなくなり、結局のところパ スー氷河を横断できるところは一個所もなくなっ

た。このため、パスー氷河の横断は断念して、グ ルキンからカラコルム・ハイウエー沿いにパスー 村を通過し、バッーラ氷河側から急斜面を登って ポトンダスに上るのを余儀なくされた。この迂回 路は大変なので、翌く2000年はパスー氷河をなん とか横断したい一心で探した結果、正常ルートの 下流、小アイスフォールの下がなんとか通過でき ることを見出した。

この事実は、パスーギャルとラズダールとの間 で、氷河の流れに大きな異常が起こっていること を示している。恐らく、大きな氷の波の襲来で、 氷河の氷が目茶苦茶に壊れたため起こった現象の 可能性が高い。筆者の意見では、この変化は93年 から95年にかけての変化とは異なるものと思われ る。すなわち、93年-95年を第一次の氷の大波の 通過とすれば、98年-2000年の変化は第二の大波



米河米の残存したエンドモレーン (米河本体に押し出されて先端は湖水に到着) 米河本体 米河池 2000年の氷河本体の位置 融水の流れ

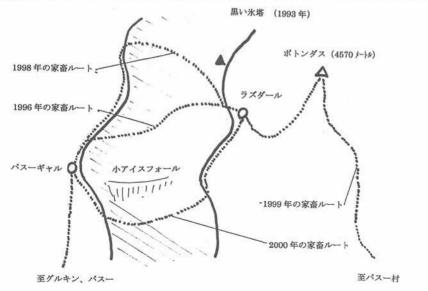
▲ (写真 6. パスー氷河末端の全景) 1998年7月

▼ (写真7. 氷河地周辺の変化)

(写真左)右岸のエンドモレーンを氷河が押し出したので、融水路が羊背岩の方に押しやられた。モレーンの下の氷は湖水まで到着している(1998年9月)。(写真右)氷河個までほとんど達した氷河本体(2000年10月)







▼ 図パスー氷河の家畜横断ルートの年次変化

▼1996年2月



▼1997年6月



▼2000年10月



で、第一の波よりも規模が大きいと判断される。 2000年には、パスーギャルと氷河末端の中間に新 たな氷塔の乱立が報告されているが、これはどち らの波によるものか定かではない。もう一つの可 能性は、第一の波の通過した後で氷面が沈下して、 そのためにクレバスがたくさんできたことも考え られる。このいずれかは、現地調査をしないと判 断できない。

考 察

ゴジャール地方には、図3に示すように、カラコルム・ハイウェーに沿って4本の氷河が流れている。グルミット氷河、グルキン氷河、パスー氷河、バツーラ氷河である。規模からいえば、バツーラ氷河が圧倒的に大きく、縦延長は58キロにも達する。グルキン氷河、とりわけグルミット氷河は規模が小さい。パスー氷河は全長25キロ、標高差4500メートルを流れる下る中規模氷河である。それでも、ヒマラヤで最大のゼム氷河、ゴジュン氷河に匹敵するスケールである。バツーラ氷河、グルキン氷河、グルミット氷河はいずれも停滞ないし後退しているなかで、パスー氷河のみが前進を始めている。

一般に氷河の流動量は、氷の厚さ、傾斜、温度に依存する。また、氷河の規模や末端位置は、気温や降雪量の変化と連動している。気象条件はこれらの氷河では大差ないと考えられた。したがって、今回観察されたパスー氷河の前進は、明らかに気象条件とは異なった、パスー氷河固有の事情によることは確かである。グルキン氷河やバッーラ氷河が黒い砂礫で覆われているのに対して、パスー氷河は末端近くまで白い氷のままで、太陽光の反射はほかの氷河よりは高い。しかし、このことが今回の異常現象と関連しているかどうかは分からない。むしろ、氷河地形のほうが大きく影響しているとは筆者は考えている。

サージ現象はアラスカやカナダ、カラコルムの 氷河に多く、ヒマラヤの氷河には見られない。筆 者の意見では、勾配のゆるい中規模の氷河でサージが頻発しているように思われる。勾配がゆるい と、ちょっとした地形の構造によって氷の流れが 影響されやすいからである。オースチン・ポスト によれば、なんらかの理由で氷河の氷が正常に流 れなくなり、上流から中流にかけて巨大な「氷の 貯蔵池」ができ、それが限界に達したときに突如 雪崩のように流れ下るのがサージだという。パスー 氷河の場合、最上部の大雪田で涵養された氷河の 氷が、大アイスフォールを一気に下り、それから ゆるい斜面を下っていく。恐らく、この上部で地 形的に氷をため易い個所があり、ここに数年間氷 が溜まり、貯蔵された氷量がダムの崩壊するように一気に崩れて下へ流れ落ちるものと想像される。 1994年7月にシスパーレ(7611メートル)の第二登に成功した菰野山岳会の報告書を見ると、ラズダールより6キロ上流のベースキャンプ付近(4100-4200メートル)の氷河に大きな氷の陥没が見受けられる。これは、貯蔵されていた氷量が一挙に下ったためではないかとも想像される。ブアルダール氷河のサージでも、中流部の多量の氷が一気に下ったために、一時的に氷河の表面が凹んだことが報告されている。

パスー氷河の異常な流れは、広い意味のサージ に入ると思われる(渡辺教授のコメント)が、典 型的なサージとは異なる。多くのサージ氷河では、 半年から2年以内くらいの比較的短期間に異常現 象が終息する例が多い。これに対して、パスー氷 河では8年間も異常が連続しているのである。ま だ解明できない謎がパスー氷河には隠れているよ うに思われる。

それでは、これからパスー氷河はどう動くのであろうか。現地の住民はパスー氷河がさらに前進して、氷河湖を押しつぶすことを恐れている。氷河の前進がゆっくりしているので、氷河湖の決壊による洪水の恐れは少ない。しかし、これまで氷河の融水に含まれるシルト(細かい砂)を沈殿させ、水温を高める働きをしている氷河湖がなくなると、冷たくて、しかも濁った氷河の融水がじかに下流の灌漑畑に流れ込む。シルトは植物の呼吸を阻害し、低温は生育をおくらせるので、作物に

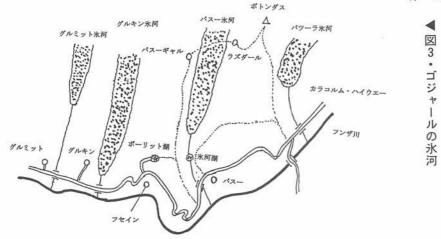
とっては好ましくない。

パスー氷河は1910年ころまでは前進し、その後80年の間に約1キロ後退したといわれる。村の古老の話では、50年前は、現在のカラコルム・ハイウエーの近くまで氷河があったという。恐らく今回の前進では、そこまで行かないと思われる。しかし、98年から99年にかけて本当に第二の大波がパスーギャル周辺を通過したのであれば、その大波は氷河湖よりさらに前進する可能性がある。12年周期で前進と後退を繰り返すといわれるパスー氷河の動きは、今後も監視、研究する必要があり、その結果を今後の氷河災害の予知につなげたいものである。

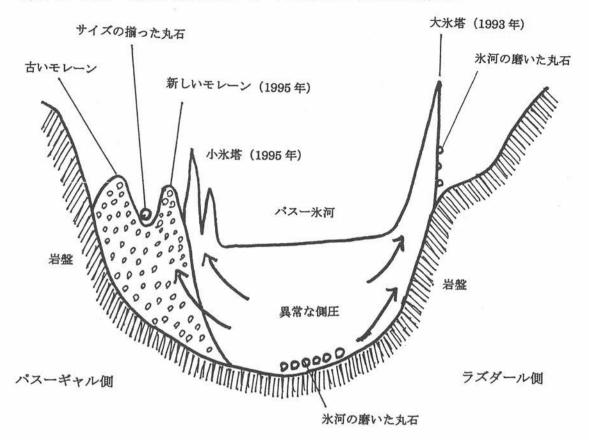
水河の動きは100年単位で観察しないと、その 概要は把握できないといわれている。たった8年 間の観察ではいかにも不十分であるが、93年4月 にラズダールで偶然観察した氷の異常な波の動き が8年後に6キロ下流の氷河末端まで到着するこ とを確認できただけでも幸運であった。登山隊で は、氷河の調査のようなフィールドワークはむし ろ登山の邪魔になるので歓迎されないが、トレッ キングでは逆に楽しみを与えてくれる。未知の魅 力を求める点で、トレッキングも学術調査も共通 したものがあり、この楽しみを多くのトレッカー の方に味わってもらいたいと願っている。

謝辞

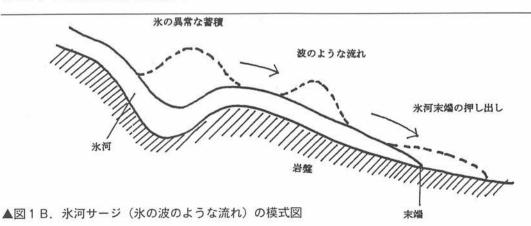
貴重な情報を提供していただいた内田秋子さん、 小田切久子さん、アミヌラー・ベイグ、ラスール・ カーンに感謝する。



▼図1A. ラズダール側の巨大な氷塔とパスーギャル側の小さな氷塔の生成模式図



ラズダール側(左岸)では、強固な岩盤があるために、異常に高まった氷河の側圧力の逃げ場がなく、やむなく岩盤に沿って空に伸びていったと考えられる。一方、パスーギャル(右岸)では、圧力の一部は軟弱なモレーン層に吸収され、新しいモレーンを形成するのにエネルギーが消費された結果、氷塔は大きく成長しなかったものと理解される。古いモレーンと新しいモレーンの間に、なぜサイズの整った丸石があったのか、その理由は定かではない。



なんらかの原因(地形、大雪崩など)で氷がある個所に異常に蓄積し、その限度を超すと、雪崩のように 高速(といっても最大で1日130メートル)で流れ下る。氷の波が末端に到達すると、下方に押し出して、 時に河川の流れを止めて天然のダムを造る。このダムが決壊すると、しばしば大洪水をもたらす。

地域ニュース

《ブータン》

千葉大隊ブータンの未踏峰へ

千葉大学山岳部の登山隊(吉永英明隊長ら6人)が今秋ブータンの未踏峰(標高約7,100m)に挑む。9月24日にブータンの首都ティンプーを出発、カラカチュ峠(5,050m)を越えて10月初旬にBCを建設。約2週間の登山期間で初登頂を目指す。(9/15朝日新聞)

《インド》

JAC東海隊ガングスタン登頂

JAC東海隊支部隊が創立40周年を記念して、インド、ヒマチャル・プラデシュ州(H・P州)のガングスタン(6,162m)に派遣した登山隊(南西稜隊・田中守之隊長(71)、北壁隊・水野起己(49)隊長)は、8月5日午前11時55分、北壁隊水野隊長ら4名、南西稜隊田中隊長ら3名が登頂に成功し、頂上でのランデブーに成功した。7日には鈴木常夫(65)ら3名も登頂した。

フルーテッド・ピーク成功!

H・P州のフルーテッド・ピーク (6,134m) に挑んでいた山中八千代隊長ら4名の練馬山の会 隊は、8月16日に隊長ら3名が登頂に成功した。

《パキスタン》

スパンティーク登頂

烏 辰克(41)隊長ら6名の埼玉岳連隊は、8 月14日9時15分に天野賢一(37)、稲葉龍太郎(27)、 荻原里美(29)が通常ルートの南東陵から登頂に 成功した。

明大隊GIにも登頂

前号でも伝えたとおり、高橋和弘 (27) 隊長ら6名の明治大隊はガッシャーブルム II 峰 (8,035

m) に7月10日に全員登頂。同隊はその後、ガッシャーブルム I 峰 (8,068 m) に挑んでいたが、8月13日に同峰北面ジャパニーズクーロアールから高橋隊長、早川敦 (27) 加藤信慶 (25) 森章一 (26) 天野和明 (23) 谷山宏典 (22) の6人全員が登頂に成功した。

パキスタンなどに避難勧告!

9月13日にアメリカで発生した国際貿易センタービルなどに対する同時多発テロ事件に関連して、16日外務省は、犯人が潜伏しているとされるアフガニスタンの近隣国(中国、パキスタン、イラン、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン)のアフガニスタンとの国境50キロ以内の範囲を「家族等退避勧告(危険度4)」に指定。さらにパキスタン全域を「家族等退避勧告(危険度4)」に引き上げ、渡航の延期と滞在中の邦人に対して避難を呼びかけた。

尚、この勧告は5段階の評価で、最高は「避難 勧告(危険度5)|

《中国》

三つの未踏峰に登頂

伊東亨 (71) 隊長ら7名の登山隊はチベット自 治区のニェンチェンタングラ山群のラーユン峰 (推定6,020m) など三つの未踏峰に登頂した。同 隊は72歳を最高齢に全員55歳以上の隊員。

(9/18 朝日新聞)

チョー・オユーに登頂

安村 淳 (55) 隊長ら3名のマウンテンゴリラ 隊は、9月22日に隊長と隊員の日比栄子 (59) が チョー・オユー $(8,201\,\mathrm{m})$ にノーマル・ルート から登頂した。

《ネパール》

今秋のエベレスト登山隊なし!

ネパール観光省が発表したポスト・モンスーン の登山隊リストを見ると、今秋ネパール側から世 界最高峰に挑む登山隊はひとつも存在しない。

多くの記録を塗り替えた春の賑わいがうそのように今秋のネパールは登山隊が減少し、22隊 9 カ国にとどまっている。国王の射殺事件やマオイスト(毛沢東主義者)の活動の影響もあったと思われる。その中で、登山隊の国籍も日本は 5 隊と最も多くの隊を派遣。ついでドイツの 3 隊となっている。ポーランド隊が挑むアンナプルナⅢ峰南東稜など注目される。

尚、エベレストのチベット側には数隊の登山隊 が入山している。

ヒマラヤから

フルーテッド・ピーク便り

ヒマラヤ協会の皆様には特にお世話になりながら7月29日に日本を出発し、8月5日スピティー山域フルーテッド・ピークのBC(4,500 m)にやっと着きました。5人の隊員が直前に4人になり、皆それぞれの役目を頑張っています。スタッフもBESTメンバーです。あとは私達の頑張りあるのみです。本当にありがとうございました。

フルーテッド・ピーク隊長山中八千代

ニルカンタ便り

この度のニルカンタ峰遠征に際し、ニルカンタ及びガルワール山域の情報を送っていただきありがとうございました。93年に佐々木裕一が計画したサトパント氷河からの北面ルートが、8年を経てその許可を取得できたこと今、複雑な気持ちで当時のことを思い出しております。リベンジ、ニルカンタ!などという思いはありませんが、悔いのない登山をしたいと思っています。明日バドリナートに向けデリーを発ちます。とり急ぎお礼方々安着報告にて失礼します。

同人ビスータリ 松山 昭

アピ便り

ナマステ!

私達は準備も整い、9月7日にカトマンズを出 発致します。バスで3日掛けてバイダリ、そこか らマハカリ川のキャラバンを1週間楽しんでアピ・ コーラにBCを作る予定です。

西ネパールの山旅を楽しんできます。 2001/9/6 チーム・アピ2001登山隊

チョー・オユー・ローツェ便り

先日はお世話様でした。9月5日にモンスーン 最中のカトマンズに入りました。

イマイチの天候ですが、準備は順調に進み10日にはチョー・オユーに向けて出発します。が悪天がコダリまでの道が崩れたりで時間がかかりそうです。

野沢井君たちは7日にカトマンズを発っていま す。出発のご連絡まで。カトマンズにて

邢田

Books

「チベット潜行1939」

戦前(昭和14年1939)の関東軍の指令によって、蒙古人になりきってチベットに入った当時22歳の野元甚蔵の手記である。滞在の多くをシガツェで過ごしたが、当時のチベットの状況を知る上では貴重な資料である。と同時に、私には戦前の中国の状況、日本の状況を恒間みることが出来てとてもすがすがしく読み終えることが出来た。

A 5版 361ページ 2001年8月15日刊 悠悠社

「生きて帰れ!」 (須藤建志追悼集)

1998年8月8日、ラカポシ偵察中に落石のため亡くなった須藤建志君の追悼集である。

「ラカポシに逝く」として事故報告書、「軌跡ー 須藤建志=人と山」として遺稿や山行を共にした 岳人による山行記、「追悼-須藤建志を忍ぶ」と して岳友らの追悼文が収録されている。

166ページ 2001年8月8日刊 京都岳人クラブ

2001年秋ネパール登山隊リスト

	山 名	標高	隊長名	数	玉	ルート
1	ダウラギリ I	8167	ファヴレ•アドリアーノ	12	イタリア	北東稜
2_	ダウラギリ I	8167	星野 龍史		日本	東壁
3	ダウラギリ I	8167	山田 良二	7	日本	北東稜
4	ダウラギリ I	8167	石井 清	5	日本	北東稜
5	マナスル	8163	近藤 和美	6	日本	北東面
6	アンナプルナⅢ	7555	ジビニュ•クロール	5	ポーランド	南東稜
7	アンナプルナⅣ	7525	マット・ロルフ	7	オーストラリア	北面
8	アンナプルナⅣ	7525	ガレイ•ハイエス	8	オーストラリア	北面
9	プモリ	7161	キ・ワンキム	9	韓国	北東稜
0	プモリ	7161	ニコラス・グブザー	1	アメリカ	南東稜
1	ティリッテョ・ピーク	7134	ゲルハルト・ピゼック	9	オーストリア	北面
2	アピ	7132	野沢井 歩	7	日本	北壁
3	バルンツェ	7129	シェグフレッド•ベルナー	5	ドイツ	ノーマル
4	バルンツェ	7129	マーチン・ゴーグルマン	12	ドイツ	ノーマル
5	フンチ	7036	城 隆嗣	6	日本	北東稜
6	ヌンブール	6957	デイブ・マクナリー	6	アメリカ	南東稜
7	ツクチェ・ピーク	6920	ゲルハルト•ドリドル	7	オーストリア	ノーマル
8	アマ・ダブラム	6812	ヨハン•ハッセ	12	ドイツ	南西稜
9	アマ・ダブラム	6812	リー•チュルジュ	7	韓国	南東稜
0	ラムタン	6700	カール・パールスマン	8	オーストリア	南稜
1	ラクシャ・ウライ	6593	サイモン・ウッズ	7	イギリス	ノーマル
2	テンカン・ポチェ	6500	デイビッド•ワリス	2	イギリス	北壁

インフォメーション

第4回関東地区ヒマラヤ研究会

標記の研究会が下記のとおり開催される。

日時:11月10日(土)~11日(日)

場所:群馬県水上町 公共学校共済組合

水上保養所 去来荘 TEL 0278-72-6311

会費:1万3千円(資料、宿泊、懇親含む)

内容: 登山報告 (ガッシャーブルムⅡ峰 (8,035

m)、スパンティーク (7,027m) アピ (7,135m)、チョモランマ (8,848m)、公演高

所登山の生理学他

申し込み・問い合わせ

TEL/FAX 0297-45-0384 夜 7 時以降後藤文明 ※ 申し込み用紙は日本ヒマラヤ協会事務所にも あります。

東京集会のお知らせ

日 時 10月29日 (月) 午後7時~

内容

場 所 HAJルーム (地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分) 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

フーバー兄弟

トーマスとアレックスの活躍

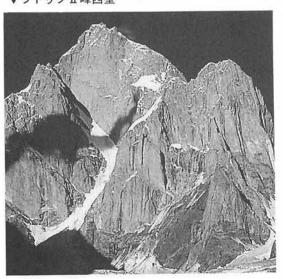
中川 裕

先日、現代の登山家をリードしている登山家は 誰だろうか?という質問を受けた。自分なりに考 えてみたが該当者が浮かばなかった。

70~80年代にかけて、国内であれば原真、小西正継という名前が直ぐに浮かんでくるし、他にも何人かの候補が挙げられる。世界であってもC・ボニントン、D・スコット、R・メスナー、J・ブリッドウェル等といったビッグ・ネームが目白押しだ。しかし、この10年に限るとなると国内では山野井康史氏の名が浮かぶだけで、海外となると前述のようなビッグ・ネームは見当たらない。唯一T・チョセンの名が浮かぶが、ローツェ南壁以降彼はアルパイン・クライミングの世界から身を遠ざけている。他にも、東欧圏の何人かのクライマーは驚嘆するような登攀を行っているようだが、残念ながら日本には十分に伝わってこない。唯一私が思いあったのはフーバー兄弟であった。

ドイツ南部のオーストリアとの国境近くのババリア地方に生まれトーマスとアレックスの兄弟は、著名なアルピニストだった父親から山の手ほどきを受け、日本の中学生になる頃にはアルプスの4千m級山を登っていた。92年、トーマス26歳、ア

▼ラトックⅡ峰西壁



レックス24歳のときに山岳ガイドとなった。その年、アレックスは当時世界の最難ルートとなる「オム 8a/5.14d」を地元の石灰岩の岩場に拓き、フリークライムの頂点に立つ。95年にはヨセミテのエル・キャピタン、サラテルートのフリー第 2 登に成功。世界にその名前が知られる。

兄トーマスも94年に「エンド・オブ・サイレンス14ピッチ、5.14b」をレッド・ポイント。(このルートは先日ステファン・グロヴァッツが5日間の準備の後第3登に成功した。) ヨーロッパにその名を知られる。

アレックスはサラテ・フリー第2登を終えるとカラコルムへ向かいラトックⅡ峰(7108m)西壁を目指したが敗退。97年に兄トーマス等と再挑戦し、見事西壁にカプセル・スタイルで直線的なルートを拓く。「マッキンリーの頂上にあるエル・キャピタン」と銘打ったこの登山はそれまでフリークライマーとしての評価しか得ていなかった兄弟の新たな出発点となる。

翌98年秋、エル・キャピタンの南東壁に「エル・ニーニョ。VI. 5.13c. 30」を拓き、世界中に衝撃を与えた。このエル・キャピタンでも最も傾斜のきついこの場所に、多くの著名アメリカ人クライマーでなくドイツ人が成し遂げたことに意表をつかれたのだ。面白いことに、この登攀に先立つ4ヶ月前、アレックスはチョー・オユー(8,201m)に登っている。8000m峰からエル・キャピタンでのフリー・クライミングへ。アレックスはこの辺の心情をアメリカン・アルパイン・ジャーナル1999年号に一文を寄せている。

昨年春、兄弟は80年に東大隊が初登攀したシブリン (6,542m) 北稜のダイレクトを目指した。アレックスが途中リタイアする中、トーマスは東大ルートの登攀に失敗したスイス人ペアの一人と即席のパーティで見事初登攀。フランスの雑誌等が主宰する「ピオレ・ドール(黄金のピッケル)賞」を受賞。さらに秋にはエル・キャピタンに新



▲シブリンのヘッドウォール

たなフリーのルート、「ゴールデン・ゲート、VI. 5.13b.41ピッチ」を拓いた。

さらに今夏、トーマスは「オーガ(人食い鬼)」の名で知られるカラコルムの名峰バインターブラック主峰(7285m)南稜の初登攀に成功。主峰の登頂はC・ボニントン、D・スコットらによる初登頂以来24年ぶりというビッグ・クライムを成し遂げ、アレックスはチマ・オヴェストの巨大なハングした壁の中に、オールフリーのルートを追加した。

「岩と雪」の休刊後、私達は世界のクライミン

グシーンからの情報をほとんど得られなくなってしまった。70~80年代には先にあげたクライマー達の登山報告はすぐに翻訳されて「岩と雪」で読むことが出来たし、ボワヴァンやグロヴァッツといった氷や岩のスペシャリストが来日して私達は彼らの"クライム"をすぐそばで観察して、少なくとも道具ぐらいは同じものを揃えたりしていた。

「より高く、より困難を求めて。」という言葉に代表される「アルピニズム」は今の日本の登山界では、すでに家具と化して久しい大百科辞典のようなものだが、決して死語ではない。フーバー兄弟の活躍を見ていると、そんな気がする。

▼オーガの頂にて



山書散策	運動生理学百科	さわやかに山へ	中高年登山	新・山靴の音	欧日本三百名山	花と歴史の50山	山小屋物語	北アルプス	山の百名水	記念日の山に登ろう	山の気象と救急法	すぐ役立つ山の花学	炉端話の主人の
そんな時の指針として――「岳人」連載時から好評。 今まで数多く発刊された山書。何を読んだらよいか。	実績を踏まえて、分かりやすくまとめた。「どうしたら合理的で安全な登山がで	を歩き、山を楽しみ安全に下りてくるこつを伝授する。世界的な女性登山家が、初心者とアルブス、ビマラヤ	登山に年齢はない」と主張する著者が、 より安全により快適に登山を楽しめるよう、中高年登山の虎の巻。	山の仲間との交遊を綴る。週暦をむかえた著者が山への思いと、	スーパーお爺さんの山行記。	を訪れた珠玉のエッセー集。	ぐる山と人の物語。 ぐる山と人の物語。	「岳人」に3年余り連載した「山人探訪・男達の賦」に加筆、登山をより楽しむための一冊。	久島まで、山の百名水を取材。 山岳写真歴30年、北海道 利尻から尾	人それぞれの記念日の日付と標高が	平易に紹介。 平易に紹介。	【飛騨高山の花見術入門書。	きのお話。 著名な山小屋の主人たちが宿泊の登
河村 正之 著	山本正嘉著	田部井淳子著	福島正明著	芳野 満彦 著	田中三郎著	田中澄江著	柳原修一著	柳原修一著	山下喜一郎著	石井光造著	桜井 博幸 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	小野木 三郎 著	工藤隆雄著

エヴェレスト入山者 [1969-2000=32年間]

(注)派遣母体後の()内は登山隊員+報道隊員等であるが、学術隊員、医師などは登山隊員とした。氏名の×印は、その登山で死亡したもの。

[1] 1969年春・偵察[ネパール側]

日本山岳会(3+1=4)

隊長:藤田佳宏(36)/隊員:植村直己(27)、菅 沢豊蔵(24)/報道:相沢裕文(36)

[5月25日南西壁取り付き6.500mまで偵察]

[2] 1969年秋・偵察 [ネパール側]

日本山岳会 (8+4=12)

隊長:宮下秀樹(38)/隊員/田辺寿(38)、中島 寛(31)、小西政継(31)、植村直己(28)、佐藤之 敏(27)、井上治郎(24)、大森薫雄(36)/報道: 白井久夫(36)、野口篤太郎(36)、木村勝久(39) 佐藤茂(31)

[11月1日、南西壁右ルート8,000mまで到達]

[3] 1969年秋・偵察 [ネパール側]

スキー探検隊 (9+5=14)

隊長:三浦雄一郎(36)/隊員:加藤幸彦(36)、 安久一成(31)、石黒久(23)、土田勝(24)、佐々 木卓(23)、佐伯富男(40)、山田和彦(31)、藤野 和夫(36)/報道:山本栄一(39)、鰺坂青青(35)、 大滝勝(26)、檜山秀樹(24)、知久秀男(31)

[6,800mまでの偵察]

[4] 1970年春 [ネパール側]

日本山岳会(30+9=39)

隊長:松方三郎(70)/隊員:大塚博美(45)、住吉仙也(43)、松田雄一(39)、藤田佳宏(37)、松浦輝夫(35)、平林克敏(35)、田村宏明(32)、中島寬(31)、平野真一(31)、土肥正毅(31)、小西政継(31)、渡部節子(31)、河野長(30)、加納嚴(29)、神崎忠男(29)、錦織英夫(29)、長田正行(29)、植村直己(28)、×成田潔思(28)、鹿野勝彦(26)、神山義明(27)、吉川昭(27)、安藤千年(26)、嵯峨野宏(25)、井上治郎(24)、伊藤礼造(23)、中島道郎(29)、広谷光一郎(37)、大森薫雄(36)/報道:木村勝久(39)、相沢裕文(37)、佐藤茂(32)、原田益夫(27)、平顕二(34)、内藤

敏男(37)、野口篤太郎(37)、堅野正三(32)、中 川寛(28)

[5月11日南東稜から松浦、植村両隊員が登頂に成功。12日にも平林とチョタレが登頂した。 4月21日C1(6,150m)にて成田隊員が高山 病のため死亡。南西壁隊は8,050mまで到達]

[5] 1970年春 [ネパール側]

スキー探検隊 (20+13=33)

隊長:三浦雄一郎(37)/隊員:藤島泰輔(37)、 安間荘(33)、加藤幸彦(37)、佐伯富男(41)、依 田雄弘(32)、曽我謹昭(27)、広田靖典(26)、山 田裕紀(25)、石黒久(24)、大場潔(24)、佐伯亘 (23)、井上孝俊(22)、只野直孝(24)、橋本正人 (32)、本山十三生(38)、西郡光昭(30)、酒井秋 男(27)、田中碩二(28)、藤瀬浩(24)/報道:山 本栄一(40)、島田公博(32)、鰺坂青青(36)、小 谷明(36)、安久一成(31)、銭谷功(37)、金宇満 司(36)、川本茂(35)、大滝勝(27)、矢野亮(26)、 中原淳巳(31)、木村僴(21)、宗田喜久松(28) [5月6日三浦雄一郎が8,100m付近からサウ スコルまでスキー滑降。午後1時固定ロープを

てシェルパ6名が死亡した。] [6] 1971年春[ネパール側]

国際隊、隊長:ディーレンファース(2)

伝わり雪のある地点まで降下、そこからスキー

で滑降した。4月6日アイスフォールが崩壊し

隊員:植村直己(29)、伊藤礼造(24)

「植村が8.250mまで到達]

[7] 1973年秋 [ネパール側]

第二次RCC (41+5=46)

隊長:湯浅道男(36)/隊員:住吉仙也(47)、青木洋(35)、上田富雄(34)、遠藤二郎(35)、森田勝(35)、飯塚誠一(32)、石黒久(27)、犬木精一(27)、岡部勝(26)、加藤保男(24)、三羽勝(31)、小暮勝義(30)、近藤国彦(29)、合田敏夫(26)、桜井正巳(30)、桜井洋介(23)、重廣恒夫(25)、須田義信(28)、清水清二(27)、高見和成(28)、丹下博(26)、根岸知(26)、長谷川恒男(25)、深

田良一(30)、福島博憲(33)、松田昭(28)、三戸田一郎(31)、下坂信夫(25)、重野太士二(30)、国井治(30)、本郷三好(22)、前谷東雄(24)、山田和夫(27)、鹿野勝彦(30)、渡辺高根(25)、坂野俊孝(28)、田中壮吉(32)、金田正樹(27)、字野耕平(34)、佐藤俊三(30)/報道:藤木高嶺(46)、今井幹雄(33)、中村和夫(43)、赤松威善(36)、寺田捨巳(33)

[10月26日南東稜から石黒、加藤両隊員が秋期 初登頂に成功した。当初の目的であった南西 壁は、右ルートの8,380mで断念した。10月1 2日C2上で雪崩のためザンブーが行方不明]

[8] 1975年春 [ネパール側]

女子登攀クラブ (15+7)

隊長: 久野英子(42)/隊員: 田部井淳子(35)、 真仁田美智子(33)、奈須文枝(33)、渡辺百合子 (32)、永沼雅子(27)、平島照代(27)、塩浦玲子 (29)、荒山文子(25)、三原洋子(34)、種谷由美 (26)、中幸子(27)、北村節子(26)、藤原すみ子 (26)、阪口昌子(29)/報道: 鰺坂青青(41)、江 本嘉伸(34)、北川敏孝(35)、岩下莞爾(39)、赤 松威善(38)、中村進(29)、下田建一

[5月16日南東稜から田部井がアン・ツェリンと登頂し、女性の世界初登頂となった。]

[9] 1979年秋 • 偵察「中国側]

日本山岳会(6+3=9)

隊長:斎藤惇生(50)/隊員:高見和成(34)、長谷川良典(32)、横山宏太郎(32)、尾崎隆(27)、 磯野剛太(25)/報道:岡島成行(35)、北川敏孝 (39)、中村進(33)

[北西壁下部6,500mまで偵察。北稜のノースコル下で雪崩が発生し、高所協力員の王洪宝(39)、米馬扎西(42)、羅朗(41)が行方不明]

[10] 1980年春 [中国側]

日本山岳会(26+13=39)

隊長:渡辺兵力(65)/隊員:浜野吉生(42)、宮下秀樹(49)、斎藤惇生(50)、加藤保男(31)、中村省爾(37)、小原俊(33)、西山正二(33)、横山宏太郎(32)、降旗義道(32)、長谷川良典(33)、甲斐邦男(32)、山下松司(30)、三谷統一郎(24)、神谷雅行(29)、神崎忠男(40)、高塚武由(37)、高見和成(34)、重広恒夫(32)、小林利明(31)、

賀集信(31)、伊丹紹泰(30)、尾崎隆(27)、和田 昌平(26)、磯野剛太(26)、×宇部明(31)

報道:島田公博(42)、江本嘉伸(39)、岡島成行(35)、北川敏孝(39)、大島則之(32)、岩下莞爾(44)、木村静雄(42)、中村進(33)、田代啓史(29)、佐藤幸一郎(27)、新井明搏(27)、松野豊(23)、智弁健二(21)

[5月3日北稜から加藤が登頂。10日北西壁から尾崎、重広両隊員が下部初登攀し登頂した。 2日北西壁7,900m付近で宇部が雪崩のため 死亡した。]

[11] 1980年冬 [ネパール側]

明治大学 (11+6=17)

隊長:植村直己(39)/隊員:土肥正毅(42)、菅沢豊蔵(37)、×竹中昇(27)、松田研一(26)、三谷統一郎(24)、植木琳夫(33)、武井滋(31)、小畸尚(45)、岡沢修一(31)、吉田稔(27)/報道:原田益夫(00)、阿久津悦夫(43)、他4名

[1月27日三谷とシェルパがサウス・コルに達したが登頂を断念した。1月12日6,800m付近で竹中が転落死亡した。]

[12] 1981年春 [ネパール側]

明治大学 (20)

隊長:中島信一(42)/隊員:麻生惇巨(38)、西村一夫(36)、長谷川良典(33)、町俊一(33)、根深誠(33)、坂本純一(30)、和田耕一(28)、田中淳一(28)、松田研一(26)、大西規雄(26)、三谷統一郎(24)、佐久間一嘉(24)、中西紀夫(22)、田口伸(22)、松村定樹(21)、高野剛(21)、荒井保明(27)、林田康明(25)、交野武一(72)

[5月20日、田中、田口両隊員が西稜の8,750 mに達したが登頂を断念した。]

[13] 1982年冬 [ネパール側]

イエティ同人 (7+2=9)

隊長: ×加藤保男(33)/隊員: 佐々木慶正(27)、 中村省爾(39)、×小林利明(34)、宮崎勉(36)、 鈴木繁(30)、関崎健弘(27)/報道: 迫田泰敏 (37)、塚本福治郎(59)

[12月27日南東稜から加藤が登頂に成功。しかし、南峰のコルで小林と共にビバークしたと連絡が入った後、翌朝から二人は行方不明となる] [14] 1983年秋 [ネパール側] イエティ同人(5)

隊長:×吉野寛(33)/隊員:×禿博信(33)、沢 上登(31)、遠藤晴行(26)、鵜飼寛(32)

[10月8日南東稜から吉野、禿、遠藤が無酸素 登頂したが、下山中、禿はヒラリー・ステッ プ上で滑落行方不明となり、吉野も翌朝ヒラ リー・ステップ下から滑落死亡した。]

[15] 1983年秋 [ネパール側]

山学同志会(8)

隊長:川村晴一(35)/隊員:鈴木昇巳(30)、岡野孝司(33)、大木哲(27)、小西政継(45)、小西郁子(36)、小西希(11)、小西繭(10)

[10月8日南東稜から川村、鈴木が無酸素登頂に成功した。パサン・テンバが8日南峰下からネパール側に転落行方不明となった。]

[16] 1983年冬 [中国側]

カモシカ同人 (17+4=21)

隊長:高橋通子(41)/隊員:根岸知(36)、貫田 宗男(32)、大蔵喜福(32)、白野民樹(36)、福王 寺高男(30)、山崎祐和(28)、三浦洋三(26)、三 枝照雄(26)、米山芳樹(24)、小林研(24)、高野 剛(24)、福山信(40)、蔵本郁子(30)、猿渡健司 (33)、増田真一(22)、近藤謙司(21)/報道:山 田新(37)、佐久間秦雄(27)、斎藤安平(29)、若 林純(26)

[12月9日高野が北西壁の8,100mに到達した のが最高到達点となった。]

[17] 1983年冬 [ネパール側]

カモシカ同人(10)

隊長:高橋和之(40)、宮崎勉(36)、山田昇(33)、 秦国雄(36)、尾崎隆(31)、村上和也(28)、鈴木 繁(30)、浅地徹(36)、塙勉(36)、鍛冶真理子 (35)

[12月16日南東稜から山田、尾崎、村上とナワン・ヨンデンが冬期登頂に成功した。]

[18] 1985年秋 [中国側]

隊長:長谷川恒男(37)/隊員:宮地由文(37)、 ×石井慎一(33)、太田健児(26)、星野清隆(25)、 島田貞雄(33)、長谷川昌美(32)、佐々木徹(28)、 田中ユリ子(40)、清水久信(31)/報道:長町満 [9月10日北稜8,200mまで隊長ら3名が到達 したのが最高到達点となった。9月17日石井がノースコル下6,900m付近で雪崩のため行方不明となった。]

[19] 1985年秋 [ネパール側]

植村直己物語(9+2=11)

隊長:八木原圀明(38)/隊員:宮崎勉(37)、山田昇(35)、名塚秀二(30)、村上和也(30)、大本哲(29)、三枝照雄(28)、佐藤光由(24)、小林俊之(19)/報道:阿久津悦夫(47)、斎藤安平(32)、[10月30日南東稜から山田が無酸素登頂。同日、八木原、名塚、大本、三枝、佐藤、阿久津も登頂した。阿久津は日本人最高年令登頂者、佐藤は日本人最年少登頂者記録を塗り替えた]

[20] 1985年冬 [中国側]

カモシカ同人(9)

隊長:高橋通子(43)/隊員:貫田宗男(34)、大 蔵喜福(34)、福島正明(35)、早川晃生(29)、大 矢正彦(27)、関根孝二(30)、近藤謙司(23)、樫 原良明(38)

[12月15日北西壁8,450mに大蔵、近藤が到達したのが最高到達点となった。]

[21] 1986年春 [ネパール側]

高山研究所 (5+1=6)

隊長:遠藤晴行(29)/隊員:岡留恒建(52)、松 永忠則(34)、長尾妙子(30)、原エリザベス(33) 報道:五十住和住(25)

[5月10日南東稜の8,600 mまで遠藤、松永が 到達したのが最高到達点となった。]

[22] 1987年秋 [中国側]

防衛大学校(26+4=30)

隊長:川上隆(59)/隊員:若浦義弘(52)、大崎直彦(49)、沢本裕明(31)、杉江琢美(26)、×横山正夫(44)、福楽勣(40)、山口陽一郎(37)、涌井鋼一(37)、狩野隆平(31)、松本圭一郎(27)、小林勇夫(28)、日根野伸一(27)、上田寛孝(25)、高橋宏一郎(25)、細田美紀男(34)、松岡茂(33)、岩崎俊夫(38)、佐藤敏志(36)、真神勇(37)、清沢幸則(33)、千葉勝彦(34)、篠田力良(30)、吉田治(29)、佐藤今朝治(29)、河内正樹(25)/報道:北村皆雄(45)、明石太郎(39)、村口徳行(31)、井納吉一(28)

[9月2日横山が東ロンブク川5,350m地点で

渡渉に失敗し死亡。10月10日西稜8,100m地 点に到達したのが最高到達点となった。]

[23] 1987年冬 [中国側]

ウータンクラブ (4) HAP無し

隊長:長谷川恒男(40)/隊員:長谷川昌美(34)、 内海正義(31)、星野清隆(28)

[北東稜に直登するルート。2月9日隊長と星野が7,650mに達したのが最高到達点。]

[24] 1988年春「中国側]

日本山岳会 (22+42=64)

隊長:橋本清(50)/隊員:斎藤惇生(59)、重廣 恒夫(40)、伊丹紹泰(38)、奥淳一(40)、馬場博 行(39)、名越實(39)、須藤建志(38)、貫田宗男 (37)、山田昇(38)、上野幸人(34)、三谷統一郎 (32)、小池英雄(28)、馬場哲也(28)、山本宗彦 (28)、山本篤(25)、高橋省吾(24)、長谷川清一 (32)、平田和男(35)、増山茂(40)、宮田賢二 (48)、神園泰比古(37)/報道: 岡島成行(44)、 迫田泰敏(42)、畑川剛毅(28)、鰺坂青青(54)、 秋元和夫(28)、武者孝幸(43)、長沼茂(41)、平 川均(29)、荒木識(29)、岩下莞爾(52)、田中元 一(47)、中村進(42)、磯部恵一(47)、中村省爾 (45)、湯本昭一(45)、牧長春雄(44)、宮下英俊 (41)、三ツ橋徹月(40)、北野政憲(40)、尾田文 夫(40)、阿妻秀行(38)、古井戸博(38)、佐藤幸 一郎(36)、山田和也(34)、広江潤(33)、村口徳 行(31)、清水真二(31)、佐藤博文(30)、三枝照 雄(30)、智弁健二(30)、勝見明久(29)、井納吉 一(29)、田中芳樹(28)、大沢賢(28)、森木宏明 (27)、山川公一(28)、中谷久美子(27)、大西宏 (26)、保坂昌宏(24)、佳幸憲(24)、千野克彦 (24)、渡辺龍夫(24)

[日本、中国、ネパール合同登山隊。5月5日 北稜から山田、ツェリン・ドルジェ、アン・ ラクパが登頂しそのまま南東稜を下降した。 同日山本宗彦らサポート隊も登頂。さらに撮 影班の中村進、中村省爾、三枝も登頂し、頂 上から日本に同時中継を行った。]

[25] 1988年春 [ネパール側]

日本山岳会(24+10=34)

隊長: 湯浅道男(51)/隊員: 磯野剛太(34)、加藤智二(27)、山本一夫(42)、酒井光秀(39)、大

宮求(39)、渡辺雄二(37)、織田博志(36)、鈴木清彦(31)、北村貢(29)、高野剛(28)、熊崎和宏(26)、相馬勉(28)、井本重喜(25)、佐藤正倫(24)、三輪文一(39)、大貫敏史(27)、森本志天(31)、忽滑谷和孝(26)、×水腰英隆(48)、鈴木尚(44)、中世古隆司(53)、高村真司(27)、植木一光(40)/報道:奥野富士郎(42)、井原敦(30)、中島正晶(30)、大嶋則之(40)、北村皆雄(44)、馬場順一(41)、明石太郎(40)、隅田一明(35)、日下部政三(32)、青田浩(30)

[前掲の登山隊のネパール側。5月5日北村貢が南東稜8,350mのC5を越えたが時間切れで登頂を断念した。4月21日BCで水腰が高山病のため死亡した。]

[26] 1988年冬 [中国側]

ウータンクラブ (5) HAP無し

隊長:長谷川恒男(40)/隊員:長谷川昌美(35)、 内海正義(32)、星野清隆(28)、西山俊男(58)

[7,800m地点が最高到達点となった]

[27] 1989年秋 [中国側]

日本ヒマラヤ協会(9) HAP無し

隊長:尾形好雄(41)/隊員:新郷信廣(46)、平 田清志(43)、橋本康弘(35)、谷口雅朗(31)、今 村裕隆(30)、田辺治(28)、西川修(25)、石坂工 (24)

[10月22日北西壁8,200mに今村、田辺が到達 したのが最高到達点となった。]

[28] 1989年秋 [ネパール側]

カトマンズクラブ (24)

隊長:金沢健(43)/隊員:大西保(47)、三谷統一郎(33)、黒滝淳二(37)、塩田純一(39)、桑原信秀(45)、後藤健二(42)、中村譲治(41)、八橋秀規(36)、安藤昌之(33)、二俣勇司(34)、堀弘(32)、高橋堅(31)、中西紀夫(31)、大西宏(27)、榎井克明(29)、柳原武彦(28)、吉村哲明(28)、山本篤(27)、堤信夫(38)、高尾馨(42)、西平惠子、成田涼子、金沢明子

[10月13日南東稜から三谷、大西、山本とシェルパ3名が登頂した。]

[29] 1990年秋 [ネパール側]

日本/韓国合同隊(3)

隊長:桑原信夫(58)隊員/柳原武彦(29)、杉

山耕一(22)

[10月6日南東稜8,500mに杉山が到達した。 また韓国側隊員が行方不明となり柳原が7日 南峰下でザックを発見した。]

[30] 1991年春 [中国側]

明治大学(9+1=10)

隊長:平野真一(52)/隊員:坂本文男(47)、長谷川良典(43)、斉藤伸(32)、松村定樹(31)、中沢暢美(27)、佐野哲也(24)、廣瀬学(24)、竹口甲三(40)/報道:青田浩(32)

[北東稜下部からカンシュン氷河側に派生する 尾根(東稜)に入り5月上旬に6,400mで断念]

[31] 1991年春「中国側]

貫田/二上(2)

隊長:貫田宗男(40)/隊員:二上純一(39)

[5月27日北稜から貫田、二上とシェルパ2人が登頂したが、帰路頂上直下で二上が滑落し行方不明となった。]

[32] 1991年春 [ネパール側]

G登攀クラブ(8)

隊長:岩添保夫(41)/隊員:小野奨三(27)、住 川仰(42)、河村敬介(32)、早川文昭(27)、中島 明(29)、山田良二(27)、川田愛一郎(32)

[10月5日南東稜8,750mで登頂断念した。]

[33] 1991年冬 [ネパール側]

群馬県山岳連盟(16+1=17)

隊長:八木原圀明(45)/隊員:尾形好雄(43)、 名塚秀二(37)、吉田秀樹(38)、橋本康弘(37)、 木村文江(36)、田辺治(31)、江塚進介(30)、佐藤光由(30)、小西浩文(29)、小田隆三(29)、後藤文明(26)、星野龍史(24)、松崎宣行(24)、秋山剛(21)、吉村哲明(30)/報道:長久保豊(29) [1992年1月8日南西壁8,350mにC5を設営し15日と29日にルート工作隊が入るも結局ここが最高到達点となった。]

[34] 1992年春 [中国側]

日本/カザフスタン合同隊(11)

隊長:大宮求(43)/隊員:斎藤一男(66)、×星 学(28)、小久保壮(22)、谷口洋一郎(35)、情木 康之(24)、加藤隆次(30)、土屋一廣(59)、森井 寿美(38)、市原基(44)、大宮敏彦(36)

[5月23日北東稜のC6直前の8,350m付近で

星が行方不明となった。大宮隊長は22日と23日 C6下でビバークし、24日カザフスタン隊員に 救助され、北稜経由ノース・コルから下山]

[35] 1993年冬 [ネパール側]

群馬県山岳連盟(9)

隊長:八木原圀明(47)/隊員:尾形好雄(45)、 名塚秀二(39)、田辺治(32)、江塚進介(32)、佐 藤光由(32)、後藤文明(28)、星野龍史(26)、住 吉仙也(67)

[12月18日南西壁から名塚、後藤が冬期初登攀、 20日にも田辺、江塚が登頂、22日にも尾形、 星野も登頂に成功。]

[36] 1994年春 [ネパール側]

愛知学院大学(10+1=11)

隊長:寺西申生(52)/隊員:湯浅道男(57)、本郷三好(42)、石川富康(57)、鈴木清彦(37)、浜谷光安(38)、高村真司(33)、藤田元弘(33)、熱田渉(27)、浜田好子(55)/報道:石川保典(32)[5月8日南稜から鈴木と熱田がシェルパ4名と登頂。13日にも石川がシェルパ3名と登頂し、日本人最高年令登頂者記録を塗り替えた][37] 1994年秋[ネパール側]

宮原/貫田(2)

隊長: 宮原巍(60)、貫田宗男(43)

[10月10日南東稜から貫田がシェルパ2人と登頂したが、還暦登頂を目指した宮原は南峰コルで左目の視力を失い登頂を断念した。]

[38] 1995年春[中国側]

日本大学(20+10=30)

隊長:神崎忠男(55)/隊員:平山善吉(61)、池田錦重(56)、古野淳(33)、忍田剛(33)、井本重喜(32)、家口寬(26)、田端宏好(25)、野本修(25)、田村幸英(23)、原田智紀(21)、原田義隆(59)、鈴木武樹(39)、大前義孝(28)、永井澄明(62)、森山勇(55)、田中潔(38)、野口邦和(42)、神宮太(24)、唐元新(22)/報道:東野良(50)、白石章治(33)、蔵田茂(48)、清水義浩(31)、斉藤文彦(28)、村口徳行(40)、井納吉一(37)、続素美代(27)、富田晴海(36)、山賀純一(28)

[5月11日北東稜から吉野、井本がシェルパ4名と共に登頂に成功した。]

[39] 1996年春[中国側]

福岡市山岳協会(15+1=16)

隊長:植松満男(59)/隊員:池邊勝利(53)、平 井啓介(47)、矢田康史(47)、吉村由美子(50)、 富永重夫(48)、石村義男(45)、副島敏夫(42)、 菊池守(40)、杉山洋隆(40)、花田博志(35)、轟 孝史(28)、関剛(25)、上田恵爾(23)、重川英介 (21)/報道:田端良成(33)

[5月11日北稜から花田と重川とシェルパ 名と登頂。13日にも菊池と杉山がシェルパ 名と登頂したが、インド隊から疲労し救助を求めた隊員を皆殺しにしたと言われなきクレームをつけられた。重川は日本人最年少登頂者記録を塗り替えた]

[40] 1996年春 [中国側]

立正大学(6)

隊長:山崎幸二(41)/隊員:園田敦彦(36)、大 滝勝(26)、竹内洋岳(25)、工藤大介(21)、山岸 和夫(49)

[5月17日北稜から竹内とシェルパ2名が登頂。 21日にも山崎が登頂した。]

[41] 1996年春 [ネパール側]

国際公募隊 [隊長] ロブ・ホール (1)]

隊員:×難波康子(47)

[5月10日国際公募隊に参加した南東稜から登頂した難波が下山中、サウス・コル上で滑落しその後コル付近で凍死した。]

[42] 1996年春 [ネパール側]

I M A X 撮影隊 [隊長:デビッド・ブレッシャーズ (1)]

隊員: 続素美代(28)

[ビデオ撮影担当として参加し、サウス・コルまで到達した。]

[43] 1996年秋 [ネパール側]

国際隊 (ドイツ) (2)

隊員:小西浩文(34)、大久保由美子(27)

[9月21日ローツェ・フェース7,500mまで。 シェルパのロブサン・ザンブーが雪崩のため 死亡した。]

[44] 1997年春 [ネパール側]

ノエビア

隊長: 辻田希代彦(53)/隊員: 大倉天(60)、高 貝喜久雄(56)、山本篤(34)、塩田純一(46)、貫 田宗男(45)、西本征二(58)、熊野章(43)、小林幸男(45)、前田慎吾(42)、村口徳行(40)、山主文彦(35)、澤道代(28)、竹内洋岳(26)、久保彰宏(25)、斉藤小淑(24)、高橋和弘(23)

[4月17日 ローツェフェース7,300mに山本、 竹内、高橋が到達したのが最高到達点となった]

[45] 1997年春 [中国側]

国際公募隊: [隊長: ラッセル・ブライス 亜細亜大学 (4+3=7)]

隊長:野口健(23)/隊員:田附秀起(21)、宮下 邦子(21)、大蔵喜福(45)/報道:榛葉健(33)、 北川高(48)、廣田智生(28)

[大蔵が北稜8,500mまで。]

[46] 1997年春 [中国側]

国際公募隊 [隊長:ラッセル・プライス(1)]

隊員: 続素美代(29)

[47] 1997年秋 [中国側]

FOS (2) HAP無し

隊長:戸高雅史(34)/隊員:戸高優美() [雅史が単独で9月下旬、北稜8,000mまで達 したが強風のため登頂を断念した]

[48] 1998年春 [中国側]

昭和山岳会(11+3=14)

隊長:小野寺斉(47)/隊員:渡辺一夫(62)、樽 木正保(64)、寺沢正男(62)、高野松寿(62)、中 島俊弥(33)、上村博道(33)、阿部訟二(34)、中 島忠男(60)、大津義徳(34)、桃沢正幸(62)/報 道:高島和宏(31)、中里雅行(42)、土肥治朗 [5月18日北稜から中島俊と阿部がシェルパ名

と登頂。19日にも小野寺と上村がシェルパ名と登頂した。]

[49] 1998年春 [中国側]

日本勤労者山岳連盟(12)

隊長:近藤和美(56)/隊員:永田幸一(40)、大神田伊曾美(54)、坂本正治(38)、橋本久(45)、 倉橋秀都(38)、佐藤賢(44)、桑原巌(62)、川原 慶紀(57)、矢野利明(45)、西嶋錬太郎(55)、正 木直子(41)

[5月18日北稜から倉橋、永田、佐藤、橋本、 坂本とシェルパ1名が登頂。20日に矢野、川 原とシェルパ1名が登頂し、22日にも近藤が シェルパ1名と登頂した。川原は日本人最高 年齢登頂者記録を塗り替えた]

[50] 1998年春 [中国側]

テレビ朝日 (3+9=12)

隊員:村口徳行(41)、井納吉一(39)、澤田実(29)/報道:北村皆雄(50)、原一郎(40)、弘理子(34)、毛利立夫(42)、山主文彦(36)、小倉憲悟(27)、三浦洋一(44)、酒井治孝(45)、杉江琢美(37)

[5月19日北稜から村口、澤田が登頂した]

[51] 1998年春「中国側]

国際公募隊 [隊長:ラッセル・ブライス (1)]

隊員: 続素美代(30)

[5月25日北稜から続が隊長、シェルパ1名と 登頂]

[52] 1998年春[中国側]

隊長: 小西浩文(36) (1)

[

[53] 1998年夏[中国側]

FOS (2)

隊長: 戸高雅史(35)/隊員: 戸高優美(00)

[54] 1998年秋 [ネパール側]

SS関西 (9)

隊長:田中義勲(56)/隊員:上平真一(57)、松本憲親(55)、栄建一(49)、山田慶周(54)、高階茂(32)、河本栄作(31)、上平真由美(52)、吉見孝(55)

[10月11日南西壁右ルート8,040mに C 5 を建 設したが登頂を断念した]

[55] 1998年秋 [ネパール側]

スペイン隊 [隊長: ホァン・コロ 亜細亜大学 (3+2=5)]

隊長:野口健(24)/隊員:村口徳行(42)、大蔵 喜福(46)/報道:榛葉健(34)、北川高(49)

[10月15日南東稜の8,350mまで到達したものの天候悪化のため登頂を断念した。]

[56] 1999年春 [中国側]

国際公募隊 [隊長:ラッセル・ブライス (2)]

隊員:小塚和彦(39)、小林邦次(55)

[5月27日北稜から小塚がシェルパらと登頂]

[57] 1999年春 [中国側]

国際公募隊 [隊長: R.パウロスキー (1)]

隊員:オサムラ・マサル

「詳細不明だが登頂はしていない」

[58] 1999年春 [中国側]

イタリア隊 [隊長: S.マルティーニ (1)]

隊員:石川冨康(62)

[詳細不明だが登頂はしていない]

[59] 1999年春 [中国側]

国際公募隊 [隊長: T.ギア(1)]

隊員:福沢勝幸(59)

「詳細不明だが登頂はしていない]

[60] 1999年春 [ネパール側]

グルジア「隊長:

亚細亜大学

(2+1=3)

隊長:野口健(25)/隊員:西尾マリ(00)/報道:

北川高(50)

[5月13日南東稜から野口がシェルパ4名と登頂した]

[61] 2000年春 [ネパール側]

国際公募隊 [隊長:ガイ・コッター(1)]

隊員:大久保幸光

[詳細不明だが登頂はしていない]

[62] 2000年春 [中国側]

北海道山岳連盟(6)

隊長: 江崎幸一(48)/隊員: 二井田高敏(60)、 工藤寛(33)、高橋留智亜(34)、中村喜吉(53)、 山本強(44)

[5月17日北稜から江崎、工藤、高橋が2名の シェルパと登頂し、高橋は日本人女性で4人 目の登頂者となった。]

[63] 2000年春 [中国側]

東北海外登山研究会(9)

隊長:八嶋寬(50)/隊員:保坂昭憲(52)、今野一也(61)、三原洋子(59)、小林重一(45)、田中敏雄(44)、児玉隆司(43)、山下健夫(51)、清水健太郎(26)

[5月17日北稜から八嶋、保坂、児玉がシェルパ2名と登頂。19日にも田中、小林、山下、今野がシェルパ3名と登頂。]

[64] 2000年春 [中国側]

法政大学(15)

隊長:中村敏夫(60)/隊員:太田九二、増田昌

司(67)、山本俊雄(63)、酒井省二(65)、藤島弘徳(61)、青木司(59)、立垣晃弘(59)、田中康夫(59)、河村健司(58)、高取剛充(40)、松本伸夫(34)、荻尾雄二(27)、井ノ口信明(24)、武川政義(22)

[5月17日北稜から松本がシェルパ2名と登頂。 18日荻尾もシェルパ2名と登頂し、19日山本 がシェルパ2名と登頂し、世界最高年齢登頂 者記録を塗り替えた。]

[65] 2000年春「中国側]

東日本(2)

隊長:丸山芳雄(61)/隊員:鈴木石雄(64)

[5月21日丸山が北稜8,300mに到達し断念]

[66] 2000年春 [中国側]

清掃隊

隊長:野口健(26)

[北稜8,300mに達して清掃を行った]

年少登頂者トップ20

	氏	名	生年月日	登頂年月日	歳∙日	ルート
1	重川	英介	1974.11	1996. 5 .11	21	北稜
2	佐藤	光由	1961. 4 .	1985.10.30	24	南東稜
3	×加藤	保男	1949. 3 .	1973.10.26	24	南東稜
4	竹内	洋岳	1971. 1 .	1996. 5 .17	25	北 稜
5	野口	健	1973. 8 .	1999. 5 .13	25	南東稜
6	星野	龍史	1967.11.	1993.12.22	26	南西壁
7	遠藤	晴行	1957. 2.	1983.10. 8	26	南東稜
8	山本	篤	1962.10.	1989.10.13	27	南東稜
9	熱田	涉	1967.1.	1994.5.8	27	南稜
10	×大西	宏	1962.5.	1999.10.13	27	南東稜
11	尾崎	隆	1952. 9 .	1980. 5 .10	27	北西壁
12	萩尾	雄二	1972.7.	2000. 5 .18	27	北 稜
13	×三枝	照雄	1957.10.	1985.10.30	28	南東稜
14	石黒	久	1945. 9 .	1973.10.26	28	南東稜
15	村上	和也	1955. 3.	1983.12.16	28	南東稜
16	×植村	直己	1941.2.	1970. 5 .11	29	南東稜
17	大本	哲	1956. 2.	1985.10.30	29	南東稜
18	澤田	実	1968.7.	1998. 5 .19	29	北稜
19	続	素美代	1967.12.	1998. 5 .25	30	北 稜
20	鈴木	昇巳	1953. 2.	1983.10. 8	30	南東稜

高令登頂者トップ20

	氏	名	生年月日	登頂年月日	歳•日	ルー	1
1	山本	俊雄	1936.7.	2000. 5 .19	63	北和	凌
2	今野	一也	1939. 4 .	2000. 5 .19	61	北利	麦
3	川原	慶紀	1940.11.	1998. 5 .20	57	北和	凌
4	石川	富康	1936.11.	1994. 5 .13	57	南和	麦
5	近藤	和美	1941.11.	1998. 5 .25	56	北和	麦
6	保坂	昭憲	1948. 2 .	2000. 5 .17	52	北和	凌
7	山下	健夫	1949. 1 .	2000. 5 .19	51	北利	麦
8	八嶋	寛	1950.3.	2000. 5 .17	50	北和	麦
9	小野	寺 斉	1950. 9 .	1998. 5 .19	47	北利	麦
10	江崎	幸一	1952. 3 .	2000. 5 .17	48	北利	麦
11	×難波	康子	1949. 2 .	1996. 5 .10	47	南東和	麦
12	阿久江	聿悦夫	1938.8.	1985.10.30	47	南東和	麦
13	中村	省爾	1942.5.	1988. 5 . 5	45	北和	麦
14	小林	重一	1954. 9 .	2000. 5 .19	45	北和	麦
15	橋本	久	1952.10.	1998. 5 .18	45	北利	麦
16	矢野	利明	1952.11.	1998. 5 .20	45	北利	麦
17	尾形	好雄	1948.7.	1993.12.22	45	南西	達
18	田中	敏雄	1955.8.	2000.5.19	44	北利	麦
19	佐藤	賢	1954.9.	1998. 5 .18	44	北利	麦
20	児玉	隆二	1956.8.	2000. 5 .17	43	北和	麦

◎冬期登頂者

尾崎隆 (1983.12.16 南東稜) 山田昇 (1983.12.16 南東稜) 村上和也 (1983.12.16 南東稜) 名塚秀二 (1993.12.18 南西壁) 後藤文明 (1993.12.18 南西壁) 田辺治 (1993.12.20 南西壁) 江塚進介 (1993.12.20 南西壁) 尾形好雄 (1993.12.22 南西壁) 星野龍史 (1993.12.22 南西壁)

◎無酸素登頂者

鈴木昇巳 (1983.10.8 南東稜) 川村晴一 (19 83.10.8 南東稜) 遠藤晴行 (1983.10.8 南東 稜) 山田昇 (1985.10.30 南東稜)

- ◎縦断(北稜から登頂し南東稜を下降した)山田昇(1988.5.5)
- ◎初登攀

北西壁下部 (1985.5.10) 尾崎隆、重廣恒夫

◎秋期初登頂

南東稜から(1973.10.26) 加藤保男、石黒久

◎女性初登攀

南東稜から(1970.5.16) 田部井淳子

20世紀日本人エヴェレスト登頂者リスト

No.	氏	名	生年月日	ルート	登頂年月日	年	備考
01	松浦	輝夫	1934.2.	南東稜	1970.5.11	36	日本初
02	×植村	直己	1941.2.	"	"	29	.11
03	平林	克敏	1934.12.	"	1970.5.12	35	
04	×加藤	保男	1949.3.	南東稜	1973.10.26	24	秋期初
05	石黒	久	1945.9.	"	"	28	"
06	田部井		1939.9.:	南東稜	1975.5.16	35	女性初
07	×加藤	保男	1949.3.	北 稜	1980.5.3	31	2度目
08	尾崎	隆	1952.9.	北西壁	1980.5.10	27	下部初
09	重廣	恒夫	1947.10.	"	"	32	"
10	×加藤	保男	1949.3.	南東稜	1982.12.27	33	冬二登
11	鈴木	昇巳	1953.2.:	南東稜	1983.10.8	30	無酸素
12	川村	晴一	1947.12.	"	"	35	"
13	遠藤	晴行	1957.2.1	南東稜	1983.10.8	26	無酸素
14	×秃	博信	1951.10.	"	"	31	"
15	×吉野	寛	1950.2.	"	"	33	"
16	尾崎	隆	1952.9.	南東稜	1983.12.16	31	冬三登
17	×山田	昇	1950.2.	"	"	33	
18	村上	和也	1955.3.	"	"	28	"
19	八木原	原圀明	1946.11.	南東稜	1985.10.30	38	
20	×ШШ	昇	1950.2.	"	"	35	無酸素
21	名塚	秀二	1954.11.	"	"	30	
22	×三枝	照雄	1957.10.	"	"	28	2度目
23	佐藤	光由	1961.4.	"	"	24	
24	阿久海	津悦夫	1938.8.	"	"	47	
25	大本	哲	1956.2.	"	"	29	
26	×ШШ	昇	1950.2.	北 稜	1988.5.5	30	初縦断
27	中村	進	1946.1.	"	"	42	
28	中村	省爾	1942.5.	"	"	45	
29	×三枝	照雄	1957.10.	"	"	30	
30	山本	宗彦	1959.12.	"	"	28	
31	三谷約	花一郎	1958.3.	南東稜	1989.10.13	31	
32	×大西	宏	1962.5.	"	"	27	
33	山本	篤	1962.10.	"	"	27	
34	\times 二上	純一	1951.12.	北 稜	1991.5.27	39	
35	貫田	宗男	1951.3.	"	"	40	
36	名塚	秀二	1954.11.	南西壁	1993.12.18	39	冬期初
37			1965.5.	"	4336	32	"
38			1961.1.	"	1993.12.20	32	
39			1961.4.	"		32	
10			1948.7.	"	1993.12.22		
1			1967.11.	"		26	7
12		20000000000	1957.2.		1994.5.8		

No.	氏	名	生年月日	ルート	登頂年月日	年	備考
43	五 禁	涉	1967.1.	南稜	1994.5.8	27	
44	石川	富康	1936.11.	"	1994.5.13	57	
45	貫田	宗男	1951.3.	南東稜	1994.10.10	43	2度目
46	井本	重喜	1963.1.	北東稜	1995.5.11	32	
47	古野	淳	1961.2.	"	"	34	
48	×難波	康子	1949.2	南東稜	1996.5.10	47	公 募
49	花田	博志	1960.3.	北 稜	1996.5.11	36	
50	重川	英介	1974.11	"	"	21	最年少
51	菊池	守	1955.5.	"	1996.5.13	40	
52	×杉山	洋隆	1955.9.	"	"	40	
53	竹内	洋岳	1971.1.	北 稜	1996.5.17	25	
54	山崎	幸二	1954.11	"	1996.5.21	41	
55	倉橋	秀都	1960.2.	北 稜	1998.5.18	38	
56	坂本	正治	1959.10.	"	"	38	
57	永田	幸一	1957.12.	"	"	40	
58	橋本	久	1952.10.	"	"	45	
59	佐藤	賢	1953.9.	"	"	44	
60	中島	俊弥	1964.12.	北稜	1998.5.18	33	
61	阿部	訟二	1963.7.	"	"	34	
62	上村	博道	1965.3.	"	1998.5.19	33	
63	小野	寺 斉	1950.9.	"	"	47	
64	村口	徳行	1956.5.	北 稜	1998.5.19	41	
65	澤田	実	1958.7.	"	"	29	
66	矢野	利明	1952.11	北 稜	1998.5.20	45	
67	川原	慶紀	1940.11.	"	"	57	
68	近藤	和美	1941.11.	"	1998.5.22	56	
69	続	素美代	1967.12.	北 稜	1998.5.25	30	公 募
70	野口	健	1973.8.	南東稜	1999.5.13	25	
71	小塚	和彦	1959.9.	北 稜	1999.5.27	39	公 募
72	松本	伸夫	1965.6.	北 稜	2000.5.17	34	
73	江崎	幸一	1952.3.	北 稜	2000.5.17	48	
74	工藤	寛	1966.6.	"	"	33	
75	高橋	留智亜	1965.7.:	"	"	34	
76	八嶋	寬	1950.3.	北 稜	2000.5.17	50	
77	保坂	昭憲	1948.2.	"	"	52	
78	児玉	隆司	1956.8.	"	"	43	
79	萩尾	雄二	1972.7.	北 稜	2000.5.18	27	
80	山本	俊雄	1954.9.	"	2000.5.19	63	最高令
81	小林	重一	1955.8.	北 稜	2000.5.19	45	
82	田中	敏雄	1955.8.	"	"	44	
83	山下	健夫	1949.1.	"	"	51	
84	今野	一也	1939.4.	"	"	61	

■ 寸感■

小説やマンガと、現実との境目がなくなってき たのは湾岸戦争の時からだったろうか。山の会合 を終えて深夜に帰宅して見たテレビの画面にしば し釘付けになってしまった。

翌朝から始まったアフガニスタン、タリバンへのマスコミの集中砲火とパキスタンでの取材合戦。まるで戦争を期待しているかのごとき報道、いつの時代にも変わらないマスコミの無責任さは眼に余る。いずれにしろ、アフガニスタンはもとより、印パ国境問題とて平穏では済みそうにない今回のテロ事件の波紋と、日本をおそっている不況をみると、我々のささやかな登山でさえ、実現が困難になって行く。山は逃げる。

事務局日誌(9月)

7日(金) ヒマラヤNo.359発送

8日(土) 第15回東北地区海外登山研究会(於、 山形、中川)

9日(日) ヤンラ・カンリ隊3名(佐藤・佐藤・

太田) 関西空港より出発

10日(月) ヤンラ・カンリ隊本隊(山森・田村・ 森山・満得)成田発 山岳自然保護関団体懇親会(於、東 京体育館、中川)

21日(金) ナンガ・パルバット報告会(於、J A C ルーム、中川)

24日(月) アジア岳人の集い(於、日本青年館、 八木原、尾形、中川)

25日(火) 東京集会(14名)

ヒマラヤ No.360 (11月号)

平成13年10月10日印刷 13年11月1日発行

発 行 人 山 森 欣 一

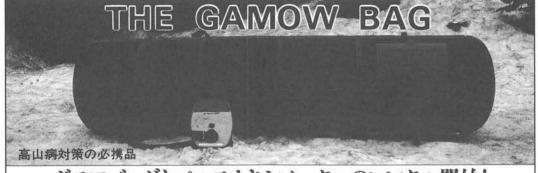
編集人中川裕

発 行 所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 4 - 2 - 7 萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、 高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたを そろって力強くサポートします。

- ●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- ●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店: 日本メディコ株式会社*

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場 2 - 5 - 7 K H ビル 7 階 T E L: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

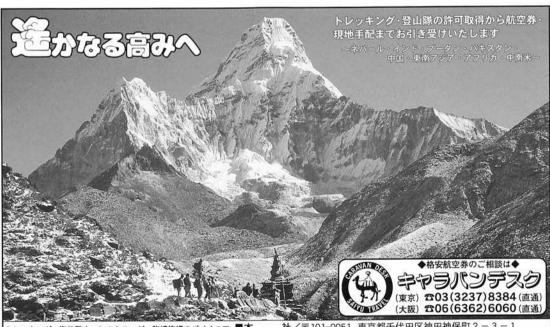


自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。 遠征隊、トレッキング、秘境への旅

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、 お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

*リテントラベル株式会社 1*203-3574-888(



トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア

社/〒101-0051

東京都千代田区神田神保町2-3-岩波書店アネックス 5F

株式 会社

■大阪営業所/〒530-0026

☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

大阪市北区神山町 6 - 4 北川ビル 5 F **☎06 (6367) 1391**(代) FAX 06 (6367) 1966

西遊旅行ホームページ (http://www.saiyu.co.jp)

お問い合わせ・お申し込みにフリーダイヤル 20120-811395 (通話料無料)をご利用下さい。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- ●登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- ●新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- ●神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- ●神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- ●神田ウェアー館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- ●八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- ●アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- ●高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397 ●松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- ●新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟プラーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- ●仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- ●盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ●ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄-条2-13-2 ☎011(883)4477
- ◆北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- ●2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- ●旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- ●外商部(メイルオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004